



図書たより

NO. 27

Jan 2018

明治大学中野図書館

図書館員オススメの本

【原田マハ『モノのあしあと : 私の印象派鑑賞術』幻冬舎, 2016(幻冬舎新書 : 443)】



この本は2015年から2016年に日本で開催された「マルモッタン・モネ美術館所蔵 モネ展」で著者が美術館で行った講演をまとめ、加筆訂正したものである。巻末をみて気がついたが、どうりで柔らかい感じの文章が続いていくと思った。この展覧会は私も京都で観ることができ、その時の興奮は忘れられない。「印象一日の出」を初め、モネの描いた数々の風景に入り込んでいく、光をみる経験、晩年白内障になりながらも描いた睡蓮の抽象的な大迫力などなどである。著者はモノのあしあとをわかりやすく語り、それをたどる旅へといざなう。確かに会いに行きたくなる、そして、ほっとしたり、興奮したりしたい。著者の小説でモネの暮らしや仕事を題材にした『ジヴェルニーの食卓』(集英社文庫)があるが、その創作意図なども書かれている。小説も合わせておすすめである。

【桑原三郎編『小川未明童話集』岩波書店, 1996】



以前、「日本のアンデルセン」と呼ばれている小川未明の「赤い蠟燭と人魚」を読んだ時に美しい文章に心地よさを覚えながらも、人間の浅はかさが招いた悲しい結末に愕然とした記憶がある。小川未明は、明治15年に新潟県高田に生まれた小説家、童話作家である。19歳で上京、東京専門学校(のちの早稲田大学)に進学し、そこで坪内逍遙に出会い「未明」という雅号をもらう。今回の「小川未明童話集」には『時計のない村』『牛女』『ちやうと三つの石』など珠玉の作品が多数ちりばめられている。他人への思いやりや社会的に弱い立場の人に寄り添う心、いつの間にか忘れてしまった良心や正義感など、おとなの心にも童話というわかりやすい形で深く訴えかけてくる。ぜひ静かな空間で小川未明のロマンチックな文章と独自の世界に浸って欲しい。

【ジョシュア・ハマー『アルカイダから古文書を守った図書館員』紀伊國屋書店, 2017】



アフリカ大陸マリ共和国、サハラ砂漠の南にドンブクトゥという町がある。交通の要所だったこともあり、写本制作・書物収集が盛んに行われ、自由な思想を持つ文化的な町であった。書物の内容は、イスラム法学など宗教色の強いものから、天文学・医学・数学・詩など多様であり、複雑な飾り文字が使われ美しいものであった。家々で保管されていたこれらの古文書を苦勞して集め、保護した人物がいた。古文書図書館の設立など、その活動も形となってきたころ、新たな問題が起こる。イスラム過激派の進出である。その人物は、約38万冊の古文書を、1000キロ離れた首都バマコへ避難させることを決意する。戦闘の中を思いがけない方法で運ぶ詳細と、アルカイダによるマリ北部の支配、それに対するフランスの軍事参入までが記されていて、興味深いものとなっている。著者はアメリカのジャーナリストである。ニュースでは聞いていても、どこか実感の伴わないテーマではあるが、この本で知の集積である古文書に対する活動と、イスラムの歴史の一つの側面を垣間見ることができる。

【トーマス・トウエイツ『人間をお休みしてヤギになってみた結果』新潮社，2017】



本書は、トーマス・トウエイツが人間をお休みして「ヤギ」になるまでの過程を記録したものである。この研究でトーマスはイグ・ノーベル賞を受賞している。

そもそも彼はなぜ「ヤギ」になろうと思ったのか。当時33歳の彼は仕事もパツとせず、彼女にもそっぽを向かれてしまう。そしてこう考える。人間特有の悩みを数週間消すのって楽しそう。人間をお休みして、少しの間動物になれたらすごいのではないか、と。

そしてトーマスは、思いもよらないことをやってのけるのである。

- ・四足歩行で歩くためにヤギを解剖してヒトの骨格との相同関係を研究する。

- ・草から栄養をとるために草に含まれるセルロースを糖に変える装置を開発する。

- ・何も考えたくない！と「ヤギの思考」になるために、頭に電気ショックを与える。等々。

さまざまな専門家の協力も得て、ついにヤギの群れとの生活に挑む。さて、トーマスはヤギになれたのだろうか。杓にはまらず、自分の目標に向かって突き進む強さと、笑われる勇気をもったトーマスの痛快な実験をぜひご堪能いただきたい。

【鵜飼秀徳『寺院消滅：失われる「地方」と「宗教」』日経BP社，2015】



穏やかならぬタイトルである。「寺院消滅」とはどういう意味なのか？

現在、日本にある寺院は約7万7000。しかし、既にその内の2万が住職がおらず後継者もない「無住寺院」で、宗教活動を停止した「不活動寺院」も2000カ寺以上に上っている。全国の寺院が静かに存続の危機を迎えている。この流れは寺院だけでなく神社も同様だ。本書は消え行く寺院の実態や、それに抗おうと奮闘する新たな取り組みなどを追ったルポである。寺院が維持出来なくなってきている原因は、戦後の都市化・過疎化・少子化などの地域社会の構造の変化が大きく、正直に言えば解決は難しい。「そもそも寺院は消滅してはいけないのか？」という問いもあり、寺院を取り巻く声は様々だ。

今では数百人しかいないとされる尼僧の言葉が印象的だ。「私たちは消えゆく存在なのでしょう。しかし、なぜ、消えてしまうのかを少し考えていただければうれしいです。消えゆくものって、どこか深みがあって、どこか光っていて、魅力があると思いませんか？」

図書館からのお知らせ

◆ 2月の開館予定が一部変更されていますのでご注意ください。

■ 2/10（土）、12（月）、17（土）、24（土）、25（日）は10時～17時開館

■ 2/4（日）、5（月）、11（日）、18（日）は休館

◆ 春季長期貸出について

【対象者】学部生・院生

（ただし、卒業・大学院修了予定者を除く）

【貸出開始日】1月26日（金）

【返却期限日】4月10日（火）

